

研究報告

学生が到達困難とする看護概論の内容 — 学生の自己評価を分析して —

近藤裕子¹⁾, 國重絵美²⁾

¹⁾徳島大学医学部保健学科, ²⁾前徳島大学医学部保健学科

要旨 看護学概論の教育内容や方法を見直す一助とすることを目的に, 授業終了後に実施した学生の目標到達への自己評価を分析した。その結果, 用語の定義や看護活動の方法論など, 体験や経験したことがないものに関しては, イメージ化が難しく, 目標への到達が難しいと感じていることが明らかとなった。

今後, 教育方法や内容の検討には, 早期に臨地体験を導入することや, 学生の体験が少ない内容については, 簡単な事例を用いて詳細に講義し, イメージ化ができるような方法の導入が必要である。

キーワード: 看護学概論, 自己評価, 目標到達, 看護学生

はじめに

看護系大学に入学した学生は, 最初に看護学概論の科目に出会う。「看護とは」「健康とは」「人間とは」の言葉の定義から, 「看護活動」「看護の歴史」など, それまでの学習や経験から想像できないような学習が始まる。大学入学直後から開始される専門科目の講義に対して, 看護学生の中には「難しい」「分からない」などの反応を示す者もみられている。

看護学生が実習や講義で困難と感ずる原因に, イメージ化が困難な現象¹⁾や, 体験の少なさ^{2,3)}, 基本的な知識不足⁴⁾などがあげられている。抽象的な概念の学習が主となる看護学概論では, 言葉からイメージ化がしにくく, 学生にとって理解が難しい授業の一つといえよう。

学生に理解しやすいように, 生活の中でみられる身近な例を出しても, その内容がまた理解できない状況がみられる。教員はどのような内容や方法を用いると, 学生が理解しやすいだろうかと悩むことがある。

学生に理解しやすい授業内容や方法を検討する一助と

して, 現在実施している授業の中で, 学生が到達が困難と自己評価した到達目標を明らかにすることが重要であると考えた。

目的

看護学概論の授業において, 学生が到達困難と認知した内容を明らかにし, 教育内容や方法を見直す一助とする。

方法

1) 対象

A 看護系大学で2003年度前期に実施した看護学概論を履修した1年生69名である。

2) 方法

①調査方法

看護学概論の学習目標から抽出した47項目の到達目標に対して, 学生自身が到達したか否かの自己評価を, 6月と7月に実施した。調査紙は全員に配布し, 所定の場所に設置した回収箱(協力する, 協力しないの2箱)のどちらかに, 個人が投函するように依頼した。

6月はそれまでに授業が終了した31項目(表1に示し

2005年8月9日受理

別刷請求先: 近藤裕子, 〒770-8509 徳島市蔵本町3-18-15
徳島大学医学部

ている評価項目番号1～30)について、7月にはそれ以降に行った16項目(同表の31～46の項目)についてである。なお6月実施分において、殆どの学生が1評価項目を記載していなかったため、この項目は分析から除外した。また表1の項目からも除外した。除外した項目は、ナイチンゲールやヘンダーソンの看護の見方、考え方を自らの生活に当てはめ、活用の是非を討論する、である。この項目は、評価欄が見えにくい状態であったことから、見落とした学生が多かったと考える。

評価実施を2回に分けた理由は、最終評価だけで学生の到達レベルを把握しても、対象となった学生にその結果を還元ができないからである。中間に評価をおこなうことにより、到達が困難な項目について、再度授業において説明ができるためである。

②評価基準

目標に到達したを4点、まあ到達したを3点、あまり到達したと言えないを2点、到達したと言えないを1点として4段階に区分した。分析は各項目の点数ごとの人数を集計し、平均値と標準偏差を算出した。2点以下の回答者の割合が50%以上の項目を、学生が到達困難と認知した内容として抽出した。

調査の趣旨に承諾が得られた学生は、6月は65名(94.3%)、7月は57名(82.6%)であった。

3) 看護学概論の授業概要

看護学概論の目標を資料1に示した。看護学概論の授業は、1年前期に開講し、1単位30時間の科目である。授業は、講義、グループワークと発表を組み合わせ実施している。ナイチンゲールやヘンダーソンのメタパラダイムに関する内容や、人口動態からの健康の読みとり、看護の歴史の一部については、グループワークを行い、その結果をクラス内で発表・討論する方法を採っている。さらに、看護の歴史では、原始から近世までの時代の看護をグループでまとめレポート提出を課している。しかし、グループワークやレポート提出の教育方法を採っても、その後必ず教員がまとめの講義を行っている。

4) 倫理的配慮

学生には調査前に無記名での評価であること、成績には無関係であること、参加は自由であり、協力の意志がある者は、協力するの箱に投函して欲しいこと、結果を次回の授業および次年度の教育に活用することについて説明し、協力を依頼した。

資料1 看護学概論 2003年度シラバスより抜粋

一般目標

1. 看護の概念の変遷と社会的変化との関連について理解する。
2. 看護の対象のとらえ方、健康水準と看護との関連、および看護の役割機能の拡大について理解する。
3. 看護活動に必要な方法論を習得する。
4. 保健医療福祉サービスにおける看護活動の場について理解し、その中における看護職員の役割機能について考察する。
5. 看護の歴史を学ぶ必要性を認識し、現代の看護の位置付けや今後の看護の発展過程を理解する。

行動目標

1. 看護の構成要素である人間・環境・健康・看護のとらえ方を歴史的な変遷と関連づけ説明し、さらに4つのメタパラダイムの関連について説明する。
 2. 看護の哲学、目的、対象、方法や、役割機能、活動の場について歴史的変遷と関連づけながら説明する。
 3. 代表的な看護理論家が論じている看護の対象、健康、環境、看護の概念間の関連を発表・討論する。
 4. 看護の4つの概念を臨地実習をとおして、自らの言葉で説明・記述できる。(2003.9)
 5. 看護活動の方法論について、理論的枠組みおよび構成要素を具体的に説明する。
 6. 健康医療福祉サービスを構成する人々と、チームにおける看護職員の役割機能について述べる。
 7. 看護の歴史の変遷をふまえて、看護と看護教育の動向を説明できる。
 8. 近代以前の看護の変遷についてまとめ発表・討論する。
 9. 21世紀に看護を担う看護専門職者に必要な能力とその根拠を明らかにし、看護職に求められる力について説明できる。
 10. 看護の対象を尊敬する態度がとれる。
- 各時間ごとに行動目標のより詳細な内容を提示する。

結 果

学生が自己評価した到達目標の平均値と標準偏差、および50%以上の学生が目標到達が2点以下と評価した項目の結果を表1に示した。

学生の到達目標の平均値は、1.7～3.2の間であった。

6月実施の自己評価において、自己評価得点の平均値が2.5以下にある項目は、30項目中12項目(40%)にみられた。それらは看護のさまざまな定義に関する項目と、健康の定義や健康のとらえ方の変遷、健康に関する施策、受療行動や医療職の養成と各々の役割に関する項目であった。これらの項目の中で、看護の概念や健康の概念などは、より評価得点の平均値が低く、学生は目標に到達困難と認知していた。

表1 評価項目における到達度の平均値と標準偏差

1～30までの項目は6月に評価 n=65
31～46までの項目は7月に評価 n=57

評価項目	平均値	標準偏差	
1. 看護について定義できる	2.070	0.896	*
2. ICNの定義を説明できる	2.188	0.899	*
3. JNAの定義を説明できる	2.125	0.875	*
4. ANAの定義を説明できる	2.062	0.875	*
5. 看護の定義から共通項目を抽出、その項目がなぜ含まれているかについて説明できる	2.831	0.816	
6. 看護を構成する要素を説明できる	2.585	0.821	*
7. 看護概念の変遷を説明できる	2.234	0.812	*
8. WHOの健康の定義について説明できる	1.692	0.858	*
9. 適応理論による健康の定義を説明できる	1.781	0.960	*
10. 8, 9以外の健康の定義を述べる	2.323	0.773	*
11. 健康に関わるさまざまな施策を説明できる	2.415	0.766	*
12. 健康の捉え方の変遷とその内容を説明できる	2.292	0.822	*
13. 既習の理論家の健康観と比較する	2.954	0.782	
14. 環境を定義できる	2.646	0.721	
15. 環境を区分し、説明できる	2.794	0.894	
16. 環境と人間、環境と健康との関連を説明できる	3.046	0.875	
17. 日本の人口動態の特徴とその理由を説明できる	2.969	0.624	
18. 日本人の死因を列記し、その変化を説明できる	2.815	0.581	
19. 年齢別死因とその理由を説明できる	3.138	0.612	
20. 出生率の変化とその理由を説明できる	2.662	0.539	
21. 日本人の健康状態を国民衛生の動向から読みとる	2.585	0.735	
22. 受療行動を説明できる	2.446	0.862	*
23. 受療時における問題点を指摘できる	2.609	0.707	
24. 医療職種の養成と各々の役割を説明できる	2.492	0.804	
25. 医療職種の種類と養成制度について説明できる	2.785	0.877	
26. 看護職の養成制度について説明できる	2.554	0.893	
27. 多様な職種が出現することの問題点を指摘できる	3.231	0.578	
28. ナイチンゲール、ヘンダーソンのメタパラダムを抽出し、発表・討論する	3.154	0.622	
29. メタパラダイムを図式し、関連性を説明できる	3.031	0.645	
30. 看護論が出現した時代背景から、その内容を討論する	2.785	0.754	
31. 看護の役割機能について想起できる	2.895	0.765	
32. 看護活動を列挙し、説明できる	2.754	0.708	
33. 看護活動の場を列挙し、説明できる	2.929	0.753	
34. 他職種と共働する中における看護の位置づけを説明できる	2.907	0.727	
35. 看護活動を支える方法論について説明できる	2.232	0.681	
36. 看護過程を定義できる	2.965	0.816	
37. 看護過程活用のメリットを説明できる	2.667	0.826	
38. 看護過程に活用されている理論を抽出し、説明できる	2.429	0.753	
39. 看護過程の構成要素を説明できる	3.054	0.811	
40. 構成要素間の関連について説明できる	2.737	0.828	
41. 各構成要素を詳細に説明できる	2.500	0.779	
42. 歴史を学ぶ意義、歴史の見方、考え方の視点を説明できる	2.839	0.840	
43. 原始から近世までの看護の歴史の概略を説明できる	2.474	0.861	
44. 近代の看護の発展を歴史的な出来事を加えながら説明できる	2.860	0.826	
45. 日本とアメリカの看護と看護教育の変遷を比較・検討する	2.482	0.824	
46. これからの看護・看護学教育の発展を展望し、課題提示ができる	2.786	0.795	

注) *50%以上の学生が目標到達が2点以下の項目

7月では平均値が2.5以下にある項目は16項目中5項目(31.3%)であった。看護活動を支える方法論についての説明や、看護過程に活用されている理論の抽出、看護過程の構成要素の詳細な説明、原始から近世までの看護の発展、日本とアメリカの看護教育の変遷を比較する、であった。これらの項目の評価得点は、6月の評価得点

よりも高く、到達困難の割合は減少していた。

次に、50%以上の学生が目標到達が2点以下と評価した項目を*で示している。6月の評価では、看護のさまざまな定義に関する項目と、健康の定義や健康のとらえ方の変遷、健康の定義や健康のとらえ方の変遷、健康に関する施策、受療行動など、30項目中12項目(40%)で

あった。7月の評価では、半数以上の学生が目標到達が2点以下と評価した項目はみられなかった。

考 察

学生は、看護学概論開始時に学習する、看護や健康の定義など、抽象的な言葉について理解が難しい。その目標への到達が困難な状況がみられている。これらの項目の到達レベルは、言葉を定義することである。日常生活において、言葉を定義して使う行為は殆どない。一般的な言葉の意味は分かっているが、改めて説明することはなかなか難しい。そのためか学生も、言葉の定義に関する目標へは、到達が困難であると考えている。言葉の定義は抽象的でイメージ化が難しいため、具体的な例を使って抽象から具体、具体から抽象への思考を繰り返し、理解を深めていくことが必要である。

6月以降の自己評価からは、看護過程に関する内容の到達が困難と回答している者が多い。前期の学習は座学の学習である。臨床を全く体験していない学生にとって、看護の方法論として学習する看護過程は、なぜこれを学習する必要性があり、どのように活用するのかについてのイメージもわからない状態であると考えられる。さらに、看護過程の基礎となっている理論についても、学習する必要性や、なぜ看護に理論が必要なのかについても考えが及ばない。我々の先行研究では、臨地実習に出かけ、初めて臨床の看護を見学することで、看護過程や看護理論の活用を知り、学習の重要性を認知していた⁵⁾。講義だけで、全く体験のない状況をイメージすることも難しい。近年、早期体験実習による学習への動機付け⁶⁻⁸⁾が言われているが、入学した看護学生にとっても、入学後早い時期に臨地での見学・体験をおこなう重要性を示唆しているといえよう。

さらに看護の歴史では、自己学習として提示した内容についての理解が低いことも明らかになった。つまり原始から近世までの看護は、自己学習により理解を深め、その後、短時間の講義で終了している。グループワークによる学習方法では、他人に依存し自己学習を殆どおこなわない学生もいる。そのため短い時間で講義を行っても、目標到達までには至っていない。このような結果から、自己学習では個々により認知領域が多様であり、自己学習のみでの教育の限界を示している。いいかえると講義の必要性を示唆していると言える。講義を2時間行うアメリカと日本の看護教育の比較についても理解度が

低い。アメリカの看護教育の内容は、学期の前半に講義した看護の復習の部分が多くあるにも関わらず、到達が難しいと評価している。これは授業開始直後に学習する看護の定義の変遷の中での講義が活かされておらず、看護の定義も十分に理解できていない結果からと考える。

学生が看護学概論の講義を理解するには、抽象度が高い用語の定義、イメージ化できない看護実践などへの目標到達が難しいことが明らかとなった。学生は、体験や経験のない事柄に関して、イメージが難しいことを表している。今後、学生が看護学概論の授業の理解を深めるには、早期に臨床を体験するなどの方法を導入していくことを検討していくことも必要である。

結 論

学生の看護学概論履修後の自己評価を分析し、目標への到達度について検討し、50%以上の学生が目標到達に困難とする内容は以下の通りであった。

1. 学生は、看護や健康の定義など、抽象的な言葉に対しては、目標到達が難しいと認知している。
2. 臨地実習の体験がない学生にとって看護活動を支援する方法論の講義は、イメージ化が難しく、目標に到達することが難しいと評価している。
3. グループワークだけで発表を行わなかった原始から近世までの看護の歴史の内容は、学生は目標到達が困難であると認知している。

文 献

- 1) 交野好子, 田邊美智子, 住本和博 他: 分娩期における母体内現象の理解に関する研究, 日本母性看護学会誌, 2(2), 55-60, 2002.
- 2) 西田みゆき, 北島靖子: 小児看護実習における学生の困難感, 順天堂医療短期大学紀要, 14, 44-52, 2003.
- 3) 青木久恵, 加藤博美, 土田美樹 他: 看護学生が患小児との関わりで困った場面での行動と思考の関係, 九州国立看護教育紀要, 7(1), 8-12, 2004.
- 4) 青木光子, 相原ひとみ, 徳永なじみ 他: 看護過程の展開における学生の困難—講義・演習終了後の分析より—, 愛媛県立医療技術短期大学紀要, 16, 55-61, 2003.
- 5) 近藤裕子, 南妙子, 岩本真紀, 他: 看護学生が基礎

- 看護学実習で認知した臨床看護－ナイチンゲール・ヘンダーソン看護論を比較・照合資料として－, *The Journal of Nursing Investigation*, 3(1), 35-39, 2004.
- 6) 藤井哲則, 林善彦, 大井久美子 他: 学外早期体験実習における学生と実習先歯科医師からの評価, *日本歯科医学教育学会雑誌*, 20(1), 97-102, 2004.
- 7) 安成憲一, 浅田章, 山野恒一 他: 医療・福祉現場での早期体験実習における医学部実習生の自己評価と看護師の評価, *医学教育*, 35(2), 121-126, 2004.
- 8) 藤井哲則, 林善彦, 藤原卓 他: 歯学部1年生の歯科医院における学外早期体験実習, *日本歯科医学教育学会雑誌*, 19(1), 136-140, 2003.

*Analysis of nursing students' selfe
- evaluation on introduction to fundamental nursing -*

Hiroko Kondo¹⁾, and Emi Kunishige²⁾

¹⁾*Major of Nursing, School of Health Sciences, The University of Tokushima, Tokushima, Japan*

²⁾*Pre-Major of Nursing, School of Health Sciences, The University of Tokushima, Tokushima, Japan*

Abstract I analyzed student's self-evaluations for meeting their goals once classes ended as a means to assist in the review of educational content and methods in the nursing overview. As a result, it became clear that it was hard for students to achieve their goals and to imagine things they had not yet experienced, particularly for terminology definitions and nursing methodologies.

In future, I believe it necessary to discuss activities that will allow students to imagine content they've not yet experienced and to introduce clinical experience earlier.

Key words : introduction to fundamental nursing, self-evaluation, the goal achievement, nursing students